20世紀半ばを生き急ぐよう駆け抜けた真の夢想家（ロマンティスト）

チェ・ゲバラ

Che Guevara

『1960年頃、世界で一番かっこいい男がチェ・ゲバラだった』

（ジョン・レノン）

Biografía

本名エルネスト・ラファエル・ゲバラ・デ・ラ・セルナ（Ernesto Rafael Guevara de la Serna）
1928年6月14日アルゼンチン・ロサリオ生

“チェ”とは、アルゼンチン特有の表現で「おいっ」という呼びかけを表する。後世歴史的な活躍を果たしたキューバ人の間で、彼の口から頻繁に聞こえる「チェ」がとても印象深かったために、敬愛を込めて「チェ・ゲバラ」と呼ばれるようになった。

そんなチェ・ゲバラの半生を振り返ると、革命家という概念よりも、むしろ情熱とロマンを求めた夢想家だったといえよう。

チェ・ゲバラ自身が南米各地を貧乏旅行して書き残した旅日記『モーターサイクル南米旅行日記』を原作に、ウォルター・サレス監督の撮った映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』は、革命家“チェ・ゲバラ“になる以前の一人の青年”エルネスト・ゲバラ“の姿を描いた作品で、日本を含む多くの国で上映されて、多くの若者に”チェ・ゲバラ”のその名と存在感を再びもたらした。

書籍　『モーターサイクル
南米旅行日記』現代企画室
エルネスト・チェ・ゲバラ／著　棚橋加奈江／訳

映画　モーターサイクル　ダイアリーズ

少年期

幼少時のチェ・ゲバラ

造船業を営む父親エドゥアルド・ラファエル・エルネスト・ゲバラ・リンチと、当時女性としては珍しく自由奔放で国際的な生き方を好む母セリア・デ・ラ・セルナ・イ・ジョサとの間、5人の長男として生まれ育った。家庭は比較的裕福な環境にあり、両親は保守的な慣習にとらわれないリベラルな思想の持ち主であったと言われている。

未熟児として生まれたゲバラは肺炎を患った後、2歳の時重度の喘息と診断された。両親は息子の健康を重視して、喘息の治療に良い環境を求めてアルゼンチンの郊外へ移住する。

両親とチェ・ゲバラ

少年期のチェ・ゲバラ

幼い頃のチェ・ゲバラは、けいれんを伴うほどの喘息の発作で生命の危機に陥り、その度に酸素吸入器を使用して回復する状態が続いた。しかし喘息にもかかわらずラグビーなどを好む活発なスポーツ少年で、プレイ中に発作を起こしては酸素吸入器を使用して、また試合に戻るなど、無鉄砲な行動は周囲をいつも驚かせた。また、中学・高校生時代からは読書に熱中し、成績は非常に優秀で数学と考古学が特に得意分野だったが、他にも心理学や工学にも関心を持ち、その知識の広さは学生の仲間内でも群を抜いていた。

祖父も喘息の持病があり、また母親がガンに冒され苦しむ姿を見て育ったチェ・ゲバラは、1947年ブエノスアイレス医科大に進学し医師を志した。

母セリアとチェ・ゲバラ

チェ。ゲバラの家族

青年期

チェ・ゲバラは子供のときから放浪の旅人であった。学生時代は自転車でアルゼンチンの旅にひと月かけて行き、また23歳の時には、高校時代からの友人アルベルト・グラナードと再会した時、以前から夢見ていた、南米からアジアまでの長い旅の計画を話しているうちに熱が入り、チェ・ゲバラは「ここから北米まで旅をしようよ！」と突然言い出したのだ。

その頃、まだ学生だった二人は、その旅の移動手段にグラナードのもつ中古バイク、ポデローサII号（500cc）を選んで、ほとんど金銭も旅の計画もないまま旅立った。

好奇心と冒険心、野望と情熱で繋がれた二人が、7ヵ月に渡り南米大陸を1万キロ縦断する中、貧困な生活や病に苦しむ人々や更にラテン・アメリカの現実など、様々な世の中の矛盾に直面することで、彼らの思想に大きな影響をもたらし、情熱というロマンのもと、チェ・ゲバラを革命家への道へと突き進めるのであった。そんな無謀な旅の全貌が後に書籍として出版され、その後、書籍をもとに映画制作されたのが「モーターサイクル・ダイアリーズ」である。

ブエノスアイレス1950年1月1日
一人でアルゼンチンの旅に出発

冒険好きの放浪青年

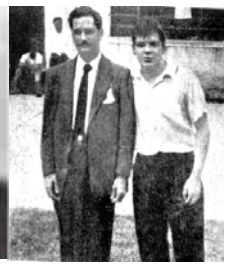
～放浪の旅での出会いと経験がチェ･ゲバラの人生を変えていく～

青年時代のチェ･ゲバラ

1952年ブエノスアイレス医科大学を1年休学したチェ･ゲバラは、友人アルベルトとアルゼンチンの首都ブエノスアイレスを出発した。ふたりが選んだルートは、アルゼンチンからパタゴニア、アンデス山脈を抜け、チリへ向い、海岸線沿いにペルーのアマゾン上流から南米大陸の北端へと抜けるというもので、計画では、エルネストの上流階級のガールフレンドとの再会や自分たちの研究課題のひとつであるハンセン病の研究所に立ち寄ることなどを目的とし、アルベルトの30歳の誕生日には旅は完了する予定だった。

彼らは南米大陸を南下した後、西へと移動し、チリの南端に位置する町ペウージャに到着した。しかし、お金のないふたりは、ハンセン病を専門とする医師団による視察を兼ねた冒険旅行だと偽ったことで、新聞社の取材を受けるなど各地を賑わした。その後もちょっとした嘘をついては、人の家に泊めてもらったり食事をご馳走になりながら旅を続けるが、旅の途中唯一の移動手段だったバイクが使い物にならなくなってしまう。しかし、ふたりは旅をあきらめることなく、その後はヒッチハイクで旅を続けた。

その後、ふたりは南米を飛び出してイースター島を目差すが船に乗れず、密航して船に乗り込んだ。途中密航がばれるものの、ふたりは船の清掃をする代わりに乗船を認められたり、チリの硝石鉱山を見学に行った際には、地元のサッカー･チームに雇われて対抗試合で大活躍するなど、その旅路では、計画以上の波乱と感動をもたらした。



チェ、ゲバラ28歳　メキシコにて

その後、サン･パブロにあるハンセン病の療養所を訪れたふたりは、ハンセン病の人々と共にしばらくの間生活した後、彼らから手作り筏をプレゼントされ、その“マンボ･タンゴ号“に乗ってアマゾン川をさらに下り、コロンビアへと向かった。

コロンビアに入った彼らは、レティシアというという街のサッカー･チームにコーチとして雇ってもらい、更に飛行機に乗って北上、首都のボゴタに到着後、更にベネズエラまで旅を続けた。

しかし、ここでアルベルトは、カラカスのハンセン病療養所で職を得たため、ふたりの放浪の旅は終わりを告げる。

1952年　筏マンボ･タンゴ号はハンセン病感謝からアルゼンチン人ふたりへのプレゼント

その後、チェ･ゲバラはアルベルトを残して、一人競馬馬を運搬する輸送機に乗せてもらい、アメリカのマイアミに到着した後、そこから飛行機で故郷のアルゼンチンへと戻ったのである。

旅の成果は大きかった。純粋で正義感溢れるチェ･ゲバラにとって、目の当たりにした最下層の労働者の過酷な現状や暮らし、更にハンセン病患者らとの出会いなど、途中巻き起こるさまざまな出来事を通して、南米社会の現実を思い知らされた放浪の旅が、彼自身の将来への経路をも変えてしまったのである。

再び、旅へ

１９５３年、医学部を卒業した後、チェ・ゲバラは25歳で、「アレルギー疾患について」と題した論文を発表して医学博士となるが、当時アルゼンチンはペロンの独裁政権下にあり、医師は強制的に軍医として徴兵されていた。そのため、チェ・ゲバラは軍医として働くことを拒み、その後、ペロンの独裁政権を逃れるようにアルゼンチンを離れて、再びベネズエラに向かい、アルベルトと合流することになる。

しかし、この旅は前回とは異なる方向へと、彼を導いていったのである。

１９５２年に起きた民族主義革命直後にボリビアを訪れたチェ・ゲバラは、そこで農民たちによる暴動に遭遇する。当時、中南米の各国ではアメリカによる経済的植民地支配に対して、次々に反乱が起きていた。そして、エクアドルで出会ったアルゼンチン人学生らから「グアテマラでは現在本物の社会革命が行われている」という話を聞かされ、急ぎグアテマラに向う。

グアテマラでチェ・ゲバラは、ペルーから亡命してきた女革命闘士イルダ・ガルディアと出会い、恋に落ちると共に、彼女から革命に対する大きな影響を受けた。

当時グアテマラは、ハコボ・アルベンス首相を中心に農地改革を中心とした社会主義的な革命が執り行われていた。ところが、１９５４年6月、CIAや米国系企業の後押しを受けたカスティージョ・アルマスを中心とした軍部によるクーデターが起き、その後、反米思想をもつ人間が次々に逮捕され、処刑され始めたために、チェ・ゲバラは仲間と共にグアテマラを離れてメキシコへと向かった。

メキシコでは、１９１０年にメキシコ革命が起き、いち早く独裁者を追放、民主的な社会改革が行われていた。その流れから首都のメキシコ・シティーには、反米思想をもった各国の亡命者たちが数多く集まっていた。
そこで、チェ・ゲバラの妻イルダは、祖国での革命を画策するキューバ亡命者たちとチェ・ゲバラを引き合わせた。この時の亡命キューバ人のリーダーが、フィデル・カストロである。

１９５５年、チェ・ゲバラ２７歳、カストロ２９歳の年、カリスマ性を持ち合う本物の革命家が出会い、後に聖化シンボルとなるよう運命を背負わされた瞬間だ。

≪１９５０年代のキューバ≫

フルヘンシオ・バティスタ 独裁政権の下、児童の６０％が未就学　水道のある家が５０％以下　パンが食べられる家庭３％
産業の6割以上は米国に支配され、ハバナ市はシカゴギャングの巣窟であり、売春産業の中枢ともなっていた。

自由と平等を求めた真の革命家誕生の瞬間

1955年頃、当時アメリカの経済的支配を受けて、キューバでは民衆が貧困に喘いでいた。そんなアメリカの傀儡であるバチスタ打倒に向けて、正義感を掲げたフィデル・カストロ率いるキューバ人の革命家たちは、野心を露に革命を計画立てていった。

後にアルゼンチン出身のチェ・ゲバラはメキシコで、祖国キューバの平和を望んだ革命を起こそうとするカストロに初めて会ったときのことをこう話している。

「初めてカストロに会ったとき、勝利はおぼつかないように思えた。しかし、私は共感と冒険というロマンティックな絆によって、またこれほど高邁な理想のためなら、他国で死んでも死にがいがあるという考えから彼と結びついたのだ」

1956年2月2日、フィデル・カストロ率いる82名の叛乱軍は、グランマ号でメキシコからキューバに向かって出航した。チェ・ゲバラはこの時、医者としてキューバ遠征軍に参加すると決めての同行だった。

ゲリラ戦の最中、野球を楽しむチェ・ゲバラ

キューバ東部コロラダス海岸に漂着すると同時に、彼らキューバ遠征軍は、事前に情報を得ていたバチスタ政府軍からの襲撃を受けて、激しい銃撃戦の末に多くの仲間を失った。かろうじて生き残った12人の革命戦士の中には、フィデル・カストロとチェ・ゲバラ、そしてフィデルの弟ラウル・カストロがいた。彼らは、即座にキューバ南東部に位置するシェラ・マエストラ山中に立て篭り、それから2年以上に亘る革命を行なった。

チェ・ゲバラは、持病である喘息の発作に苦しみながらも戦闘を続け、革命の最中でも、決して捕虜や無抵抗な敵を殺すことなどせず、それどころか、例え敵であっても怪我をした者には手当てをする深い情を常に持ち合わせていた。

1958年の暮れにバチスタがドミニカへ逃亡。1959年元旦、彼らの野望が実り、革命政権が見事樹立させた。

革命後のチェ・ゲバラ

革命後、大勢の農民を前にチェ・ゲバラは声を張り上げて言った。

「私の体はもう農民です。クーラーのある部屋では生きていけない

勝利は農民のものなのです」

革命を成功へと導き、勇敢にも戦ったチェ・ゲバラは、キューバで英雄となり、キューバ国籍を得ることになる。

その後、権力や地位に甘んずることなく、一日に16〜18時間の労働を自らに課し、身なりにほとんど金を用いず、民衆と同じく政府からの配給で暮らした。更に1959年キューバ国立銀行総裁に就任後には、まず自分の給料を5000ペソから1200ペソに引き下げるなど、自ら率先して国の再生に勤めた。その後も1961年工業相、1962年にはキューバ統一革命組織幹部会メンバーなどの要職を歴任し、経済と外交で重要な役割を果たしたのである。

キューバ国民と労働するチェ・ゲバラ

「国立銀行の金庫から出て行くお金で一番わびしく思えるのは、破壊兵器を購入するために支払われるお金だ」

1960年国立銀行総裁時代チェ・ゲバラの発言

チェ・ゲバラ

彼が飾らない性格であることは有名である。その中で、キューバ革命直後、イスラ・デ・フベントゥという島に住んでいた日系移民原田茂作さんの農園をカストロと共に視察にやって来た時の話がある。

ある時、当時キューバでは、原田さんという日系移民者の農場が極めて優秀だという噂があった。その噂を聞きつけ、チェ・ゲバラとカストロのふたりがやって来たのだ。

農園に着いて原田さんの畑に実るスイカの大きさに、彼らは驚いた。更に食べてみると、その美味しさにも驚かされた。何故この農園の作物が美味しいのか尋ねたところ、原田さんは、「キューバ人は作物を乱暴に扱うが、日本流に端正に心を込めて育てれば農産物も立派に育つ」と言った。それを神妙に聞いていたカストロは、大農場を革命政府による接収にしようとしていた考えを即座に捨てて、今のまま農場を続けた上で、他の農場を指導してもらえないかと原田さんに要請したのだ。

その時、チェ・ゲバラは原田さんの妻けさのさんが握ったおにぎりをむしゃむしゃと食べて、口の周りをご飯粒だらけにしたまま、野菜の育て方を詳しく質問していたという。

「飾らないし、威張らないし、人間ができている人だなと思いました」と、原田さんはチェ・ゲバラの人柄に感心していた。握手した手が柔らかかったことも強く印象に残っているという。

[逸話]

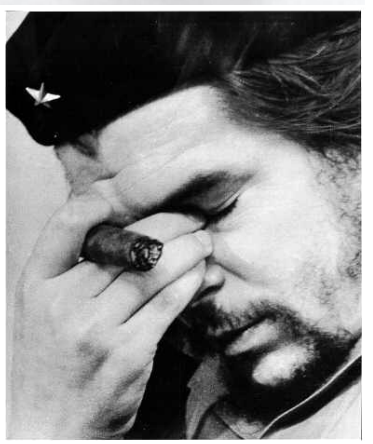
チェ・ゲバラはゲリラ戦であっても、命を賭けて戦う兵士に対しては、常に敬意を持っていた。戦闘中、血だらけになっている敵兵を見て、チェ・ゲバラは敵に駆け寄り止血法を教えた。また捕らえた政府軍捕虜に対しても紳士的に接して、無条件で釈放したりもしていた。革命後も私欲にとらわれることは一切なかった。政府要人となってからも、粗末なアパートに住み、いつも軍服にベレー帽で過ごし、彼に贈られた品々は、全て施設に寄付されたという。更に、時間があれば農園に出かけ農民達と汗を流したり、工場を訪れて労働者を激励した。

革命後　家族との再会

自分の人格を自覚しながら、息子は自分の理想に勝つ、
と神秘主義に近い形で信じる男になった。　**エルネスト・ゲバラ・リンチ**

世界のどこかで何か不正が犯されたならば、いつでも強く感ずるようになりなさい
それが革命家の最上の特質なのです
(チェ・ゲバラが子供に送った手紙の一節)

本当の革命家は、大いなる愛情に導かれている
愛の無い本物の革命家なんて考えられない
世の中で不正が行われるたび、怒りに打ち震えるという人は我々の同士だ。
チェ・ゲバラ



チェ・ゲバラの来日

キューバ革命が成功し、カストロ政権が樹立した年、1959年7月、当時31歳のチェ・ゲバラが経済使節団の団長としてアジア・アフリカを歴訪の際、日本に来訪したことがある。その目的は、日本との通商条約を締結し、キューバの砂糖をはじめとする農産物を日本に輸出し、日本から繊維や工業製品を輸入することだった。しかし、対米配慮のゆえか、日本政府の対応は非常に冷淡であり、東京都知事、外務大臣、農林大臣、通産大臣と会談し、トヨタ自動車の工場を視察するも、結果として具体的な成果を得ることはなかった。しかし、彼は日本各地を訪問し、様々な工場や研究所を精力的に視察している。この時、チェ・ゲバラは日本人の勤勉さに驚くと共に深く感動をしたと、後に帰国後の自らの書簡に綴っている。

トヨタ自動車や工場視察の様子

チェ・ゲバラは来日時ホテルからかける電話代にも気を使って贅沢は一切しなかった。そして、帰国後には残ったお金を全て国庫に戻している。

更にチェ・ゲバラは日本で視察した工業生産力に強く惹かれ、財政を農産物に依存するキューバにとって、農業国家から工業国家への転換が経済復興の最善策と考え、帰国後は日本をモデルにキューバの工業化を提案し推進しようとした。しかし、ソ連からの反対を受けるなど実現には到らず、チェ・ゲバラのソ連への不信感も益々募っていくのである。

チェ･ゲバラの広島訪問

日本滞在時、チェ･ゲバラは池田勇人通産相（当時）と会見した後、日本兵の無名戦士の墓を詣でる予定だった。しかし、「行かない、数百万のアジア人を殺した帝国主義の軍隊じゃないか。私は絶対に行かない。行きたいのは広島だ。アメリカ人が10万人の日本人を殺した場所だ」と言い、米国に対する配慮から難色を示す日本政府を無視して、実費で夜行電車に乗り広島行きを強行したのである。

チェ･ゲバラは午後2時過ぎに、新広島ホテルに到着した。このホテルは、慰霊碑から僅かの距離である。チェ･ゲバラは1500円相当の花束を受けとり、慰霊碑にささげ死者の霊をとむらった。

それから、一行は資料館に入った。通常30分程度で見て回れる資料館を約一時間かけて回った。チェ･ゲバラは、館内のさまざまな原爆による被害の陳列品を見るうちに英語で言った。

「きみたち日本人は、アメリカにこれほど残虐な目にあわされ、腹がたたないのか」

それまで、案内をしていた見口氏はもっぱら大使と話すばかりで、チェ･ゲバラとはほとんど口をきいていなかった。それまで無口だったチェがこのとき不意に語りかけ、原爆の惨禍の凄まじさに同情と怒りをみせたのである。

見口氏はいう。「眼がじつに澄んでいる人だったことが印象的です。そのことをいわれたときも、ぎくっとしたことを覚えています。のちに新聞で彼が工業相になったのを知ったとき、あの人物はなるべき人だったな、と思い、その後カストロと別れてボリビアで死んだと聞いたときも、なるほどと思ったことがあります。わたしの気持としては、ゆっくり話せば、たとえば短歌などを話題にして話せる男ではないか、といったふうな感じでした」』

広島滞在時、チェ･ゲバラ本人が残した一枚の写真がある。その写真はその後の歴史をも変える貴重な存在となるのである。

1945年7月25日

チェ･ゲバラが撮った1枚の写真

帰国後、チェ･ゲバラは「原爆の悲劇から立ち上がれ、日本よ」と題した手記を新聞に掲載し、

「痛ましいのは原爆が投下されて１４年たった今年も後遺症で多くの人が亡くなっていることだ」「資料館では、胸が引き裂かれるような場面を見た」と訴えている。

その後間もなく、旧ソ連ミサイルのキューバ配備をめぐり、核兵器使用の一歩手前まで緊迫したキューバ危機が訪れる。その際も、チェ･ゲバラの広島訪問が大きな影響をもたらしたとも言われている。そんなチェ･ゲバラの広島に対する思いはキューバ全土に広がり、現地の子供でさえ広島で起きた事実を知るまでになる。

更なる革命を求めて

フィデル・カストロとチェ・ゲバラ

歴史が彼らを導かせたといえる運命的な出会いを果たしたチェ・ゲバラとフィデル・カストロ。しかし、このふたりはキューバ革命を成功に導いた同志でありながら、その後の人生は大きく異なっていくのである。

チェ・ゲバラは、アメリカ合衆国のラテンアメリカにおける植民地政策にも、ソ連の官僚的共産主義にも与さなかった。その為、ソ連からの後ろ盾を必要とするカストロ政権の意図とは意見が合わず、チェ・ゲバラは自らの必要性を追い求めるようキューバを後にする。その時、チェ・ゲバラはカストロに宛てて長い手紙を書いた。

「・・・今、世界の他の国が、僕のささやかな力を求めている。君はキューバの責任者だからできないが、僕にはそれができる。別れの時が来てしまったのだ・・・今、世界のほかの国が僕の小さな力を望んでいる。僕を息子のように受け入れてくれた国民と別れるのだ。それは僕を深い悲しい気持ちにさせるが、きみが教えてくれた信念、我が国民の革命精神、神聖な義務を遂行するという気持ちを携え、帝国主義のあるところ、どこにでも戦いに行こう。それが僕の悲しみを癒してくれることだろう。君や国民に言いたいことは尽きないが、言葉はそれを表現できない。永遠の勝利まで、祖国か死か。ありったけの革命的情熱を込めて、きみに抱擁を送る 」

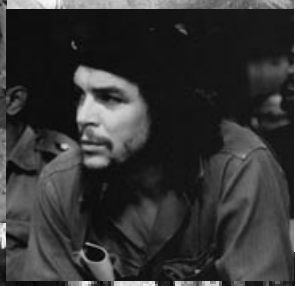
チェ・ゲバラはキューバを去った後、アフリカのコンゴに向かった。当時、独立運動が盛んに行われていたアフリカでは、ゲバラを必要としていて、彼に軍事顧問の要請が届いていた。チェ・ゲバラはそれに応じるように、コンゴの独立運動に協力するが、しかし、このコンゴ戦線でゲバラは深い挫折を味わうことになる。 解放軍の兵士たちは士気が低く、キューバで通用していたゲリラ戦の方法も役に立たない。 7ヶ月に及ぶ戦闘を繰り広げたが、チェ・ゲバラは敗走を選ばざるをえなかった。コンゴを後にしたチェ・ゲバラは、タンザニアに入り、しばらく沈黙する。

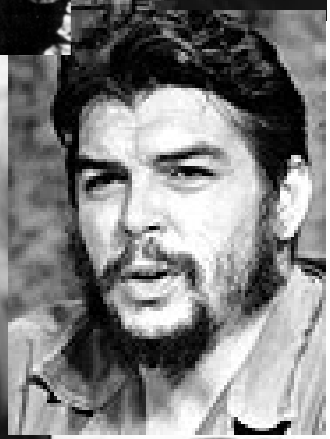
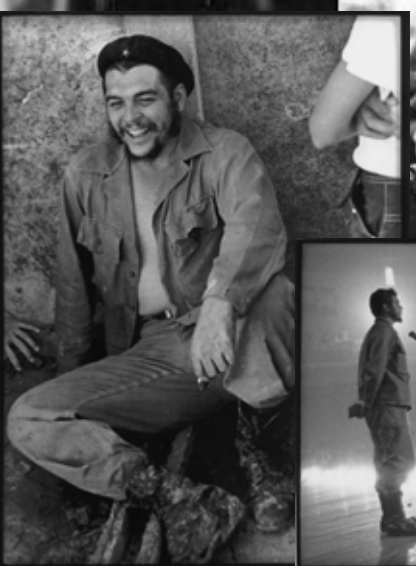
カストロからは幾度となくチェ・ゲバラにキューバに戻るよう説得された。しかし、彼は断り続けた。その時、ゲバラが書いた日記の最後に綴られた言葉。 **「私は、一体誰だったのだ……」**

その後、再び革命家として生きる道を選んだチェ・ゲバラは、3ヶ月の沈黙の後、ボリビアに渡ってラテンアメリカ解放の為の革命準備を始めた。当時ボリビアは、バリエントスが政権を掌握する軍事政権であったが、内部は分裂状態にあり、アメリカの軍事援助計画によってかろうじて支えられている状況であった。

この時、チェ・ゲバラの革命を支援する者がいた。盟友フィデル・カストロである。ふたりは訣別後も密かに連絡を取り合い、カストロはチェ・ゲバラの作戦を全面支援する為に、ボリビアにリカルドやターニャという秘密工作員を送り込んだりした。チェ・ゲバラはサンタクルスを流れるリオ・グランデの支流沿いにゲリラ基地をつくり、同時に首都ラパスに地下組織ネットワークを構築した。やがて革命に向けた壮絶なゲリラ戦が始まる。

しかし、ボリビア共産党からの協力が得られずゲリラ戦は悪戦苦闘した。更にボリビア政府軍がアメリカのCIAから武器の供与と兵士の訓練を受け、ゲリラ対策を練ったために苦戦を強いられてしまう。



ボリビア

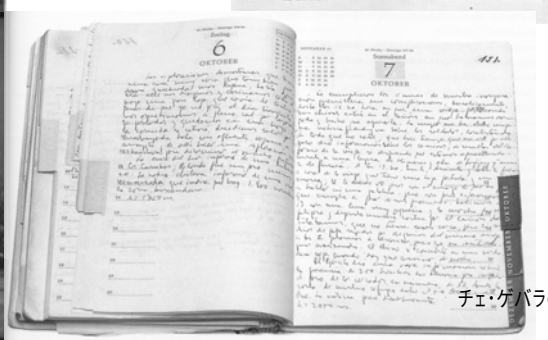
ボリビアでのチェ・ゲバラの生涯は悲惨なまでに孤独にまみれていた。ボリビアはペルー、チリ、アルゼンチン、パラグアイ、ブラジルと国境を接する。地理的には南米の中心に位置する国で、ここで近隣諸国から来る兵士を養成し、革命を南米に広げていこうという試みだった。しかし、革命をともにするはずだったボリビア共産党書記長のマリオ・モンへは、チェ・ゲバラへの協力を断った。マリオ・モンへは後にこう証言している。

「ゲバラはアフリカを去って、新たな道を見つけなければならなかったのです。ゲバラは私に言いました。『私は決してキューバに帰れない、キューバに別れを告げた。カムバックする場所を見つけなければならないのだが、ボリビアは格好の場所に見える。すでに革命の準備が出来ているからだ。』そして、ゲバラは私に言いました。『だから、この革命のリーダーの座をあなたにあげるわけにはいきません、絶対に』と」

共産党の協力を得られなかったチェ・ゲバラは、ほぼ孤立無援の戦いを強いられることになり、農民たちに希望を見いだすしかなかった。彼は、農民が自らの社会的地位を考えれば当然参加すると考えた。しかし、その期待とは裏腹に、その頃農地改革の恩恵に預かった農民たちには、異国から来た革命家と共に戦いを起こすものなどいなかった。チェ・ゲバラは焦った。キューバ国民に別れを告げたチェ・ゲバラにとって、それでも引き下がることなく、一人革命を進める情熱に身を任せた。行動を共にしていた仲間のベニグノはこう証言する。

「ゲバラはボリビア共産党が、自分を見捨てたことを知っていました。とにかく仲間を増やすために、鉱山で働く人々を、どういう人かも知らないのにゲリラ活動に入るよう説得していました。自分がボリビア共産党のリーダーから同意をもらっていないことは言わず、夢だけを語っていました。しまいには、彼は精神的におかしい人まで採用し始めるほどでした」

チェ・ゲバラは『ボリビア日記』の中で「インディオは、他人が入り込めない目つきをしている」と書き残している。



チェ・ゲバラの日記と偽造パスポート

革命の果て

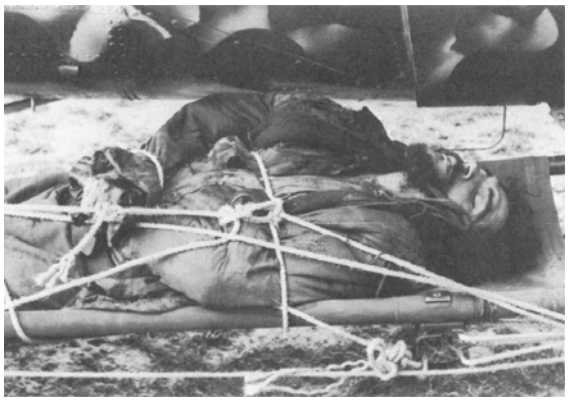
1967年10月７日夜、ユロ渓谷で野営していたチェ・ゲバラの率いる17人のゲリラ兵士は、 184人ものボリビア政府軍レンジャー部隊６個小隊や政府軍の兵士に包囲され攻撃を受けた。

この時、強靭な精神の持ち主である指揮官チェ・ゲバラは、すでに喘息の薬を失い激しい発作に襲われながらも十数キロもの重い荷物を背負い行軍を続け、左足を負傷しながら応戦したが、抵抗は及ばず捕らえられた。

捕まった際、チェ・ゲバラは敵兵士に向かって、**「俺はゲバラだ！生け捕りにした方がおまえ達の手柄になるぞ！」**と言ったという。更に、捕虜となっても革命家としてのプライドを決して失わず、無礼な言葉を吐いたボリビア政府軍士官を殴りつけた。

生前最後の写真

捕虜となった翌日1967年10月9日、チェ・ゲバラは、ボリビア共和国サンタクルス州カミリ地方イゲラ村にある小学校の教室に連れて行かれて銃殺された。その際、銃殺の為やってきた士官が震えて撃てない様子を見て、**「ここにいるのは英雄ではない。ただの一人の男だ。撃て! 臆病者め!」**と叫び、パイプを右手で振りながら、落ち着きはらった不敵な態度で射殺されたと語られている。



そして、チェ・ゲバラの最期の様子を知る人の証言では、「ゲバラは壁を背にして床に座り、既に息遣いも弱々しかった。死んだゲバラは目を見開き、微笑すら浮かんでいた」とも言われている。

その後の遺体の処置について、ボリビア政府は公表しなかった。

1967年10月11日午前4時頃、2Lのホルマリンを注射して固定された遺体が病院から突如持ち出されて以後行方不明。

ハンガリー生まれのカメラマン、アンドリュー・ジョージによれば、CIAはチェ・ゲバラを生かしておこうとボリビア軍への説得を行なったと言われている。一方、フランス人ジャーナリストのミシェル・レイによれば、チェ・ゲバラの暗殺はCIAの関与のもとになされたという。いずれにしても、米国はチェ・ゲバラが殉教者となって反米・反帝国主義のシンボルになることを恐れ、またボリビア軍のオバンド司令官も「チェの墓がゲリラの記念碑になり革命のメッカになると困る」と、埋葬の場所を報道陣に教えることを拒んだ。

射殺後の様子

次の世代の人間がどうなってほしいかということを表明するのに、彼らは“チェ“のようであるべきだと言えよう。子供たちをどのように教育するべきかということを表現するのに”チェ“の意をくんで教育しているとさっさと答えてもよいことにしよう。

フィデル・カストロ　追悼表明にて

30年後　奇跡の帰還

１９９５年１１月、ボリビアの退役軍人マリオ・バルガス元将軍はチェ・ゲバラの遺体は火葬されたという公式説明に異議を訴え、自らが知るゲバラの最期を米有力紙などに告白し、処刑後謎だったゲバラのその後が明らかになった。これを受けて、ボリビア国会人権委員会のフアン・デル・グラナド委員長は、「国家をあげて、遺体発掘を始める。」と語り、キューバとアルゼンチンによる共同調査隊が発掘に着手した。

チェ・ゲバラ殺害後30回忌を迎える数ヶ月前、試行錯誤の調査の結果、ボリビア南部、ラパスの東約５００キロのバジェグランデに、他のゲ リラ兵と共に遺体が埋められていたのが発見された。

集団埋葬現場9区。裸足の遺骨、そして、埋葬の直前指紋照合のために両手を切断されていたという、失われた手首・・・。まさしくエルネスト・ゲバラ・デ・ラ・セルナである。子供の時から喘息で変形した頭蓋骨は、コンピューターで照合され、1本かけた奥歯によって、「コマンダンテ（指揮官）・ゲバラが見つかった」と発表された。

１９９７年7月、チェ・ゲバラの遺骨は彼が”母なる国”といって愛してやまなかったキューバへ、発見された当日速やかに送還され、無言の帰還を果たしたのだ。

帰国後は遺骨は一般にも公開され、展示された遺骨を前にキューバ市民は偉大なるチェ・ゲバラに敬意を表した。

「生涯を世界平和に捧げた英雄・・・」

30年ぶりに姿を現したチェ・ゲバラの遺体

[チェ・ゲバラ]

1927年　6月ロザリオにて誕生

1930年　ブエノスアイレスに転居
最初の喘息に見舞われる。以降喘息は、生涯彼を苦しめた。

1941年　中学校に入学。夏休みに初めて1ヶ月に渡る自転車旅行を敢行

1951年12月より、友人アルベルトとオートバイで9ヶ月に渡る国外旅行をする。

1953年大学卒業。軍医への徴用を嫌い再びグアテマラに入国

1954年メキシコに入国　街頭写真屋を開業

1955年ペルー人亡命者、イルダ・ガデアと結婚
5月メキシコに亡命していたフィデル・カストロと出会う。そこで結ばれた深い絆によりゲバラは、キューバ遠征軍に参加する決意をする

1956年長女イルディタ誕生
11月25日カストロ中心とするキューバ反乱軍82名は、8人乗りヨット「グランマ号」に乗り、メキシコからキューバへ出発。ゲバラは軍医として乗船
12月2日にキューバ上陸

1957年1月、ゲリラ戦争開始　1959年まで政府軍と一進一退の攻防をくりひろげる。

19591**年**月、バチスタ大統領の国外逃亡により、反乱軍が勝利
5月イルダと離婚後
6月アレイダ・マルチと再婚　4人の子供をもうける
7月アジア・アフリカへの親善大使として来日し日本にも立ち寄る
１１月国立銀行総裁に就任

1960年4月著書「ゲリラ戦争」出版

1961年2月工業省大臣に就任
8月故郷アルゼンチンへ8年ぶり、滞在時間わずか4時間の最後の帰国

1964年１２月、国連総会キューバ主席として参加するためアメリカ・ニューヨークへ渡米、総会では演説を行う

1965年1月～3月までガーナ、ギニア、カイロを歴訪、キューバに帰国後突如、行方不明
10月キューバ共産党発足のさい、カストロより、4月1日にゲバラの記した「別れの手紙が朗読される

1966年アフリカ・コンゴでのゲリラ戦に参戦後、11月ボリビアに渡る。ボリビアでの様子を記した日記は「ゲバラ日記」として死後刊行

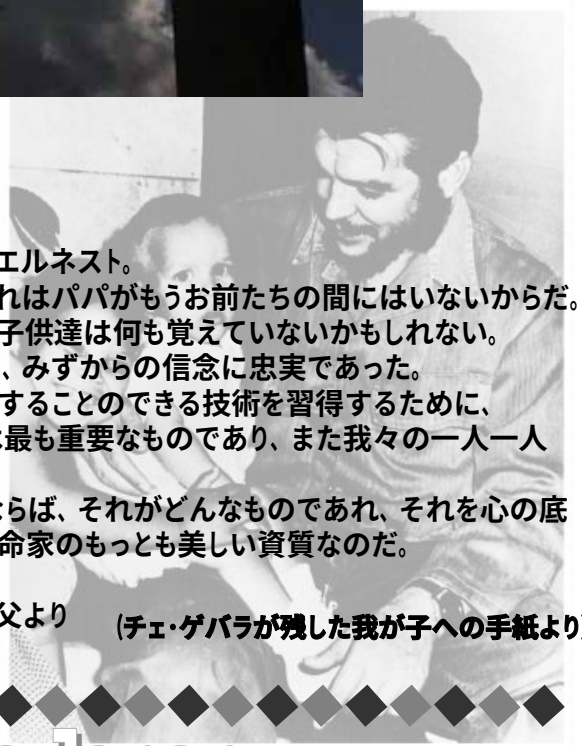
1967年ボリビアでのゲリラ戦が本格化。最初は何度か勝利を収めたが、仲間の裏切り、政府軍の兵力増強などでだんだんと劣勢化していく。そして10月8日重傷を負い捕らえられ、翌日射殺される

1997年30周忌を迎え、ゲバラの遺骨が発掘され直ちにキューバへ送還される

故郷サンタ・クララ

サンタ・クララ、この地は革命の聖地であり、チェ・ゲバラやカストロらが政府軍に最後の一撃を加えた土地である。現在もキューバのサンタ・クララにチェ・ゲバラの革命精神は顕在する。

天を見つめる巨大なチェ・ゲバラの像は銃をつかみ、左手はつり包帯をする。生前自らを冒険的革命家と呼んでいた戦士は、生前アメ玉が一つしかなければ、石で割ってまで平等に分け与えた徹底的な平等主義者だった。この世に貧富の差をなくして平等な社会と世界平和を夢見て、その息づく革命精神を遺憾なく知らしめているのである。



わが子たちへ

愛するイルディータ、アレイディータ、カミーロ、セーリアそしてエルネスト。
もし、お前たちがこの手紙を読まなくてはならなくなった時、それはパパがもうお前たちの間にはいないからだ。
お前たちは、もう私を思い出さないかもしれない、とくに小さい子供達は何も覚えていないかもしれない。
お前たちの父は、いつも考えた通りに行動してきた人間であり、みずからの信念に忠実であった。
すぐれた革命家として成長しなさい。それによって自然を支配することのできる技術を習得するために、たくさん勉強しなさい。また次のことを覚えておきなさい。革命は最も重要なものであり、また我々の一人一人がばらばらである限りは、何の価値もないのだということを。
とりわけ、世界のどこかである不正が誰かに対して犯されたならば、それがどんなものであれ、それを心の底から深く悲しむことのできる人間になりなさい。それが一人の革命家のもっとも美しい資質なのだ。
さようなら、わが子たち、まだ私はお前たちに会いたいと思う。
しかし、今はただパパの最大のキスと抱擁を送る。　　父より

(チェ・ゲバラが残した我が子への手紙より)

Atena Japan

文構成　(吉田沙由里)